

洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、

び始めたのは1962年でした。四分五裂した学生運動が目標を見失つて日本の活路を探しあぐねている時代でした。キリストの福音がもつと力強く、そして広く伝えられなければ、日本社会は本当の意味ではよくならない。日本は何も変わらないのではないかと考えさせられました。わたしはその4年後、1966年に東京神学大学に編入学しました。あれから50年が経ちました。日本社会は、願つたようにはなりませんでした。しかしながらわたしの思いは今も同じです。キリストの福音が伝えられなければ、人間も社会も本当に変わらないと思っています。

「死よりも確かなものはないのか」というわたしの問いはどうなつたでしょうか。今から思いますと、この問いにはいつの間にか答えが与えられていたように思います。その後も、わたしは妹や母、妻の母といった家族との悲しい別れを経験し、その都度自分自身の一部もまた死ぬような経験をしてきました。しかしそれでも「死よりも確かなものはないのか」という問い合わせる心をきいなむことはなくなりました。「死よりも確かなもの」が神様にはあって、その確かさ

キリストを着ているからです。《ガラテヤの信徒への手紙 3章 27節》

何かに恩れを懷くことは誰の人生にもあるのではないでしようか。現代は自然災害の危険が警告され、世界規模の関連に巻き込まれた経済不安の動向もあります。個人としては、深刻な病に襲われることもあるのではないかでしようか。

わたしは中学生時代に48歳の若さで父が病死したことであつて、死を恐れる気持ちを持つて青少年の時期を過ごしました。教会を初めて訪ねたのは高校生の頃でしたが、その動機としてもこの問題があつて、言葉で明確に言い表して「死よりも確かなものはないのか」という問いを抱えていました。

洗礼を受けさせていただいた時にも、それがありました。教会の礼拝に出席するようになって10ヵ月ほど経つた頃、聖書も読んだとはとても言えない状態で、信仰の理解も浅く、ただ頭の中で考えているだけの状態でしたが、それでも祈り求めて、洗礼を受けたい気持ちを起こされ、牧師のお宅をお訪ねしました。高校2年生の春学期の定期試験が終わった土曜日のことでした。信仰のことが分かっているか、

に信仰は触れていると感じています。パウロはローマの信徒への手紙8章に「死も、命も、天使も、支配するものも…他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛からわたしたちを引き離すことはできない」(38節)と記しています。これは本当だと思っています。何ものも引き離すことのできない神様との親しい交わりに入れられていることは、まさに「死よりも確かなもの」に捉えられていることです。

あわせて、この数年、洗礼を受けたことは「キリストを着ている」(ガラテヤ書3章27節)ことという素晴らしい事実を噛みしめています。「キリストを着ている」のはキリストの義を身にまとつていることです。もはや裸でいるのではない、神の御前に立つことのできる「死に装束」をまとつています。キリストの義と、愛と、執り成しと、赦し、そしてキリストの力に身を包まれて神の御前に立つことをゆるされていきます。これもまたこのうえなく確かな、死よりも確かなものであつて、それをわたしの「晴着」として、また「死に装束」として身にまとつていると思っています。

質問されたら答えるように、「キリスト教入門」といたたまごの本を読んで、一種の「受験勉強」のようなことをしたのも思い出します。年配の牧師であった先生は私の願いをあつさりと了解してくださって、特に試験のような質問はなさいませんでした。ただもう一人の婦人が洗礼を受け準備をしていたので、2ヶ月くらい経つたら洗礼式をしますという話でした。わたしには、その翌日の主日礼拝で洗礼を受けたいという焦りのようなものがあつて、それにもいつ死ぬか分からぬといった意識が働いていました。

もちろんわたしもそんな切羽詰まつた気持ちばかりを抱えて生きていたわけではありません。それとは別の文脈で、信仰の真理をもっと深く理解したいと願い、神学という学問の素晴らしさに触れ、この信仰と学問に生涯を注ぎたいと思うようになりました。神学の研究の道は、当然、伝道者・牧師として人生を捧げる生き方の中で、その支えや方向探求のためにあることを知り、伝道者として献身したいと思い定めるようになりました。洗礼を受けた年は、安保紛争のあつた1960年で、東京大学に入学して駒場で学

死よりも
確かなものはないのか

KATSUHIKO KONDO